ヤナーチェク：歌劇

マクロプロスの秘事

JANÁČEK
Opera
VÉC MAKROPULOS

［新聞評］

※このページで掲載している写真は全て当楽団所有のものです。

東京交響楽団演奏会「マクロプロスの秘事」

●06・12／9　東京新聞朝刊

秘薬を飲んだため三百歳を越えて生きてしまった女性が事切れる。大音量のオーケストラが、ダイナミックな動きを見せていた指揮者が、ステージが、闇のなかに消える。長寿の主人公の死と、音楽という音の生の運動の停止とが重なり合う。音楽があったことと、音楽がなくなった沈黙の状態とがともに肯定されるみごとな瞬間。再度の照明で主役のイヴォナ・シュクヴァロヴァーが浮かびあがったとき、そこにひとつの甦りを感じたのは偶然だったのかどうか。

東京交響楽団創立60周年記念定期演奏会は、カレル・チャペック台本によるヤナーチェクのオペラ《マクロプロスの秘事》。三年に一度ずつヤナーチェクのオペラを演奏してきたその四作目で、指揮も正指揮者飯森範親に変わった。（2日、サントリーホール）

感情の渦と音楽が融合

ヤナーチェクのオペラを進行させるのは朗々とうたいあげるというよりは、日常のテンポとさして変わらない言葉の抑揚だ。謎の多い主人公のまわりで起こる裁判沙汰の、複数の、そして複雑な感情のからみあい。ちょっとした対話のなかで生じるずれ。おなじ一人のなかでの起伏、逡巡。言葉による演劇的ニュアンスの変化と音楽の変化を、反復の多いこまかい音型が支え、調整する。決して容易ではないこの調整を飯森はみごとにおこない、からみあった感情の渦と音楽とを一身に引き受ける。特に強調したいのは、ときに差し挟まれる不意の休止、切り込みのようなアクセントの見事さだ。

オーケストラの後方、少し高くなったところにセミ・ステージがしつらえられ、さらにその背後のスクリーンに弁護士事務所や劇場の映像と字幕が映る。演戯と字幕、歌手とセット、オーケストラとが、セミ・ステージの両端と指揮者がつくる三角形のあいだに収まって、オペラへの集中度が高まる演出である。

世界中でレパートリーとなっているヤナーチェク作品を、レパートリーとして持てずにいる国で紹介してゆくオーケストラの着実さに気づくべきなのは、誰であるべきだろう。

（小沼純一＝早大教授、音楽文化論）

「対話」筋書きに鋭い衝撃

●06・12／5　読売新聞夕刊

東京交響楽団がヤナーチェクの歌劇「マクロプロスの秘事」を、マルティン・オタヴァ演出のセミ・ステージ形式で上演。中核をなす6人の歌い手をチェコから招いて言語の障壁を取り除き、この笑いと怖れがないまぜとなった作品を心ゆくまで楽しませてくれた。

舞台では遺産相続の係争をめぐって、歌姫エミリア・マルティの思いもよらぬ過去が明らかにされる。彼女は不老長寿の霊薬の実験台にされて、いくども転生を重ね、いまではなんと337歳。それとは知らない周囲の人々と話がすれ違うさまに笑いを誘われ、長生きの意味するところ「人生は長ければいいというものではない」に、怖れをおぼえるというわけだ。

筋書きはいきおい対話中心となるが、そのなかでも圧巻だったのが、歌姫に詰め寄る係争の当事者プルス男爵（イジー・クビーク）である。歌とも語りともつかない旋律線が煮詰まって、思わず知らず相手の出自「マクロプロス」を口にする瞬間には鋭い衝撃が走った。あるいは、歌姫と一夜を過ごしたあと「まるで死体を抱いているようだった」と悔やむくだりは、かぎりなくブラックに近いユーモアも漂ってくる。

もちろん、本来の意味での音楽を担うオーケストラも忘れてはなるまい。飯森範親が指揮する東響は、すでに前奏曲から気合十分、ヤナーチェクのコンパクトで芯のある響きを体現してみせた。とくに前述の場面におけるチェロのピチカートに象徴されるように、随所に挿入された弱音、ひきつった沈黙には目をみはるものがある。

こうして幕切れでは、幾世紀にもわたって男たちを手玉に取ってきた歌姫（イヴォナ・シュクヴァロヴァー）は、文字どおりの絶唱を残し、晴れて御昇天あそばされたのである

音楽評論家　三宅幸夫

――2日、赤坂・サントリーホール

※この記事は、各新聞社の許諾を得て転載しています。無断で複製等著作権を侵害する一切の行為を禁止します。

●06・12／14 朝日新聞夕刊

詩の語感 新鮮 絶唱に幸福感

東京交響楽団がヤナーチェク・シリーズ第4弾として、歌劇「マクロプロスの秘事」を取り上げた。セミ・ステージ形式で、主要な配役6人をチェコの歌手で固めた原語上演。歌詞の語感が新鮮で、オーケストラのモチーフとこだましあい、縦横に絡み合っていく面白さは抜群である（3日、神奈川・ミューザ川崎シンフォニーホール）。

カレル・チャペックの戯曲に基づく台本は、推理小説風の謎解きと、限りある人生の意味を考えさせる風刺が混じり合った、噛み応えのある物語だ。ヒロインは謎の歌姫エミリア・マルティ。遺産相続の裁判が結審しようとしているなか、弁護士事務所を訪れたエミリアが誰も知らない遠い過去の真相をつぎつぎと明かしていく。「なぜ彼女が・・・・」といぶかっているうちに、霊薬によって不老不死になった337歳と判明。訴訟の生き証人であり、かつ当事者だったのである。長寿をもてあまして倦怠のなかに生きながら、なおも「延命の秘術」を取り戻そうと策を弄する彼女のすがたが、悲しくもおかしい。

何よりもオーケストラが冴えていた。管弦楽曲「シンフォニエッタ」を想起させるティンパニの連打と金管が印象深い前奏曲から、きりりとした飯森範親の棒さばきに一丸となって応える。舞台裏で奏でられるファンファーレ風の楽想も、祝祭的な空間を感じさせて楽しい。全編にちりばめられた主要楽想の性格付けもこまやか。ヤナーチェク晩年の、オペラ作曲家としての充実を伝えた。

ヒロインを演じたイヴォナ・シュクヴァロヴァーは、この役の求めるドラマチックな歌唱にふさわしい声質。気位の高い宮廷歌手風のたたずまいが、酸いも甘いも知り尽くした熟女へと瞬時に変貌する声色や節回しを楽しませる。劇を牽引したのは、ヒロインを追い詰める役を演じたイジー・クビーク。喜劇的である半面、人間の浅ましさや恐ろしさもほのめかすこのオペラの、暗の部分を描いた。

さらなる延命を望んだヒロインの大往生が悲劇か否か、議論のわかれるところ。だが、エミリアの最後の恍惚とした絶唱には醜い生から解きはなたれる幸福感が漂い、やはり原作どおりの喜劇なのだ、とすなおに納得してしまった。

（白石美雪・音楽評論家）